

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No.25 2021*

中国語教育における家庭学習の有効利用についての実践報告

土居 智典

中文教育中家庭学习有效利用的实践报告

土居 智典

長崎外大論叢

第25号
(別冊)

長崎外国語大学
2021年12月

【研究ノート】

中国語教育における家庭学習の有効利用についての実践報告

土居 智典

中文教育中家庭学习有效利用的实践报告

土居 智典

概要

在入门到初级、中级的中文教育课程中,不到一年时间内让学生取得中文检定4级或3级是个非常困难的任务。虽然中文检定4级或3级所要求的语法知识和单词数量没有太大差距,但确保这些语法知识和单词的教学,以及学生进行应用练习的时间,存在一定的困难。然而,如果有效地利用家庭学习时间确保足够的学习和练习时间,学习效果就能得到提高。本论文是2016年以来长崎外国语大学中文教育中有效利用家庭学习时间的教育法的报告。

中国語学習を始めて一年未満の初中級の学習者に、確実に中国語検定4級・3級を取得させるよう指導することは、大変困難な任務である。中国語検定4級と3級の間の文法的知識の差は大きくないが、それらの級を確実に取得させるための解説や、練習時間を確保することは、大変困難である。しかし、うまく家庭学習教材を利用することで学習・練習時間を多く確保し、学習効果を高める事はできるはずである。本報告は、2016年以降の、長崎外国語大学の中国語教育の現場で、家庭学習を有効に取り込んだ試みの報告である。

キーワード

中国語教育 家庭学習 中国語検定

(1) はじめに 問題の所在

a. 独自教材作成の意義

長崎外国語大学では、一年生（ゼロ初級）向け中国語授業が週5コマ構成で行われているが、本論文は、筆者が担当している中国語講読（1コマ）についての、主に2016年以降の取り組みについてまとめたものである。ちなみに5コマ全体の構成は、会話2コマ、文法1コマ、講読1コマ、演習1コマからなっている。

筆者の2010年着任当時は、この週5コマ構成の授業の教材には、既製品の教科書を用いていた。つまり一般の第二外国語教育向けの中国語テキストをそのまま用いていたわけであるが、このような教材は基本的にどれも週1コマのみ実施の内容を想定したものであって、週5コマの学習を行っている学生を想定したものではなかった。また、既製品の教科書は、どんなに講読向け教科書と銘打ったところで、1コマの中に雑多なものを詰め込まざるをえない必要からか、会話練習的なものが織り込まれているものも少なくない。週5コマで、会話練習などの授業を分離して行える贅沢な環境で、既製品の教科書を使うということは、分業の意義を台無しにしてしまうことにもなり、非効率である。また、学生が目線から見れば、毎日同じようなことばかりやって、なかなか先に進まないという状況を

生じてしまうことも起こりうる。

上記のような状況を改善するため、筆者はある程度他の授業でフォロー可能であろう部分との重複を避ける、ないしは重複しても重複内容を発展的に補えるような講読の教材作りを始め、2016年度から運用を始めた。また、講読の授業で説明したことを重ねて説明する必要のないような配慮を行って構成した会話用テキストも作成し、かつその会話テキストは直説法で実施することを前提にして作成し、2018年度から運用を開始した。後者の会話授業用テキストと、その直説法授業についての報告は、既に報告を発表したが¹⁾、先に運用を開始した講読のテキストの運用状況については、まだ報告をとりまとめていなかった。本論文は、後回しになっていた講読テキストの運用状況について報告を行うものである。

b. レベル設定の問題

また、講読のテキストを作成する際、もう一つ重要な課題として設定しなければならないことがあった。1年を通じて試用する教科書を新たに作成する際、レベル設定をどうするかという問題である。2016年以前の一年生（ゼロ初級）向け中国語授業が、どの程度の成果を生み出していたかを、中国語検定という資格取得の実績で計ると、どのような状況であったか。あまり具体的な数字を挙げることはひかえておくが、1年で中国語4級を取得できる学生は半分にも満たず、ゼロという年度もあった。また、3級に関しては、1年のうちに希に取得できる学生が1,2人いるかという状態であった。後者については、安定的に3級合格者を出すという段階からはほど遠く、まず全体の4級の合格率を上げることも急務であった。長崎外国語大学の、学年ごとの達成目標は、1年生で4級、2年生で3級、3年生で2級、4年生で準1級という事になっているので、まずは全員が4級取得可能であるというレベル設定に出来れば、とりあえずは可という事にはなる。

しかし、長崎外国語大学の中国語教育には、もう一つ、可能であれば解決したい課題があった。長崎外国語大学では、中国語を専攻する学生と、非専攻の英語専攻の学生の混合で一年生向けの中国語クラスを構成している。専攻と非専攻を混ぜることに無理があるようにも見えるが、往々にして英語専攻の学生の方の学習モチベーションが高く、検定試験などのスコアも高いという年度がほとんどで、さしあたって分離しないクラス編成で教育を行っている。問題は非専攻の英語専攻の学生の2年次以降の学習成果である。

中国語専攻の学生には、2年生向けに会話・文法・講読・作文の授業が提供されるのに対して、非専攻の英語専攻の学生は、英語の授業と重ならない限りにおいて、中国語の授業を履修できるという状態になってしまう。運良く全ての中国語授業を履修できる学生もいるが、1コマ2コマ程度の履修が可能という程度の学生がほとんどで、履修したいのに全く履修が出来ないという学生も存在する。そうすると、1年生の段階で中国語4級を順調に取得できても、2年生になって急速に成長が減速してしまうケースがほとんどという事になってしまう。また、長崎外国語大学では、2年生の後期から留学に行く学生が多く、英語専攻の学生の多くは2年生の途中から英語圏に行ってしまう、半年から一年間、全く中国語に触れないという状況が発生する。そうすると、英語と同じくらいに中国語に対して学習モチベーションが高い学生も、中国語検定3級に到達するのは至難の業という事になってしまう。結果として、2016年以前は、英語専攻の学生は卒業までの間に、中国語検定3級取得者はゼロという状態が長らく続いていた（英語専攻であっても中国語圏に留学した学生は除く）。強く中国語検定3級取得を希望する学生でも、取得がかなわない現状はどうか打開したい課題であった。また、

そういった強いモチベーションを持った学生には、可能ならば学習最初の年度の最後の3月に3級に挑戦したいという者が必ず存在するが、そういった学生には、早めに3級を取得させるしか、現状打開策は無いのではないかという結論が浮上してくる

また、中国語専攻の学生についても、まる1年かけてちょうど中国語検定4級までの内容を学習し終わる進捗設定では、検定のスケジュールとのかみ合わせに問題を生じてしまう。中国語検定は、各年度3回、6月、11月、3月の第4日曜日に実施されるが、年度末の3月は長い春休みの末尾に位置している。春休みをプラスに利用できれば良いが、そうでない学生は逆に受験に向けてのモチベーションを維持できない状態で、検定に臨んでしまうケースも多々見られるのである。そうすると、11月の時点で4級を受験させてしまい、もしそこで不合格であっても3月にリトライできるというスケジュールで学習を進めさせることが安全策となってくる。また、中国語専攻の学生にも、3月に3級取得に挑戦したいという学生が一定数いるので、やはりそのニーズにも、ある程度応じる必要がある。ただし、1年生の到達目標を、あくまで中国語検定4級程度としている以上、全ての学生に3級取得を前提とした教科書を提供するのには問題がある。それでは、多様なニーズに応じたレベル設定を、どのあたりに落ち着けるか。これがまず新しい教科書を作成する際に向き合わなければいけない課題であるのだが、このレベル設定をどのように行ったかを、次節で詳しく紹介しよう。

(2) 1年生向け教科書のレベル設定を実際にどこに置くか

異なったニーズに、どのようにして折り合いを付けるかを考える際に、まず中国語検定4級と3級の間には、具体的にどのような違い、どのようなレベル差があるのかをおさえておく必要がある。

これは一見意外と思われるかもしれないが、中国語検定4級と3級の間、求められる語彙力には、大きな差は無い。これは筆者が長年、学生を対象に行ってきた単語テストの分析結果上、ほぼ間違いの無いことである。この分析については、別途詳しい報告としてまとめるべき内容であるため、ここでは概略のみ述べておく。これはまた別の取り組みではあるのだが、筆者の授業では、単語教材『キクタン』のそれぞれ中国語検定準4級・4級・3級対応のものを、月1回ペースで単語テストをし、学生の語彙力を測定している²。ここで興味深いのは、中国語検定準4級・4級合格者の準4級・4級向け単語テストスコアは高く、当該級の合格可能性と単語力に高い相関が見られるのに対し、3級合格者は、必ずしも3級向け単語テストで高いスコアを取れる学生ばかりとは限らず、あまり相関関係が見られないのである。もっとも、3級合格者も、準4級・4級向け単語テストでは高いスコアを見せており、『キクタン』準4級・4級掲載の単語に習熟していることは欠かせないことである。しかし、3級を取得するためには、闇雲に3級向け単語教材を、時間をかけて学習させることは、決して無駄ではないが優先順位としては低い作業になる。また見方を変えると、中国語検定4級と3級の間、単語力的な差は、そう大きくないということになる。これは指導の優先順位を考える上で、重要な点である。それでは、4級と3級の間、差となっているものは何なのか。それを発見し、そこに注力して効率よく教育を行えば、4級と3級の差は目に見えて縮まり、4級を目指す学生と3級を目指す学生が混合している条件でも、どちらのニーズにも応えられる授業は可能になってくるはずである。

それでは、中国語検定4級と3級の間、差は何か。まず、中国語検定準4級・4級のスコアと、準4級・4級向け単語テストスコアの相関が高いというのは、言い方を変えれば、単語力だけで、かなりの部分が乗り切れる段階であるという事になる。3級の方に、そこまでの相関が見られないという

ことは、単語力が低くても、文法的知識や単語以外の構文などの知識量で乗り切れるし、逆に3級のために必要な文法的知識や単語以外の構文などの知識量を増やすことに注力すれば、4級と3級の学習内容の差は縮められるという事にもなる。

それでは、4級と3級の間に、求められる文法知識に大きな差はあるのだろうか。これも結論からいえば、意外と思われるかもしれないが、大きな差は無いのである。通常、中級程度の学習で教えることが難しい、比較の表現、過去の経験をあらわす「过」、存現文、各種補語（方向補語・様態補語・結果補語・可能補語）は、どれも中国語3級の問題では不可欠の出題要素であり、十分に使いこなし、理解出来るようにならなければ合格は難しい。しかし、上記の文法事項は、中級程度で高い運用能力が求められる難易度の高い文法事項とは思われるものの、4級の問題でもそう多くはないが散見され、4級受験の際にも一通り知っておく必要があるという、厳しい現実がある。4級受験指導の目線からいうと、意外に4級で求められる文法知識のレベルが高いということである。3級受験のために、新たに付け加えなければならぬ文法事項は、「被」を用いた受身表現や、「让」を用いた使役表現など、そう多くはない。

これらを整理すると、文法的な学習内容も、4級受験対応に十分な学習指導をするのと、3級受験に最低限必要なものを指導することに、大きな開きはないということになってくる。差があるとすれば、上記文法事項を使った文章の読解や作文、聞きとりの応用・運用能力に違いがあるというわけで、練習・応用能力に関する量的な差はあっても、質的な差はほとんど無いともいえる。

そうなる、中国語検定4級と3級の間の決定的な差は、ほぼ単語以外の構文などの知識量と応用練習の量に絞られてくる。教育指導の側面からいうと、4級と3級を目指す学生が混在している場合には、この単語以外の構文などの知識量を増やす取り組みで、学生ごとに幅のある対応が可能な内容になっていけば、どちらにも過不足ない指導が行えるという事になる。上記のようなレベル設定、学習内容の優先度を前提に、2016年から使用している独自の教科書は、組み立てられることになったのである。

(3) 教科書の各週項目の構成

a. 既製品テキストの例

参考のために、筆者が2015年まで用いていたa社の中国語講読向け教科書の学習内容を、ここに挙げておこう。通年で15課分ということなので、11月末の中国語検定の時点までに進めるとすれば、せいぜい第10課程度である。中国語検定4級でも登場する方向補語のような重要な部分は、フォローできるか際どいところにあり、結果補語・様態補語については確実に間に合わず、可能補語については項目立てもない。また、補語以外の項目でいうと、“有点儿”、“是~的”を使った表現、曜日をはじめとする多くの時間詞表現、疑問詞“怎么”などが第11課以降にあるというのも、11月の4級受験対応ということ考えると苦しいものがある。学習項目上に挙がっている介詞（このテキスト中では「前置詞」とされている）も、“在”“离”“给”“从”“到”“为”だけでは心許ない。これはそもそも週1コマの授業を想定した教材であるからこのような構成にせざるを得ないのであって、これを週5コマ授業実施の環境で用いる方が悪いのである。これを仮に、進度を倍に設定して、1学期目で終了するペースで運用するというのも選択肢として考えられようが、そうすると今度はかなり過剰な学習内容を学生に押しつけてしまうことになってしまう（筆者の前任者は、そのような対応をとっていたようであるが、かなり難易度の高い取り組みであったと考えられる）。また、そもそも

表1：a社の中国語講読向け教科書の構成（通年）

第1課	人称代名詞、動詞“是”、否定を表す“不”、疑問を表す“吗”、“的”
第2課	指示代名詞、形容詞述語文、“的”の後ろに続く名詞の省略、主述述語文
第3課	場所代名詞、動詞述語文、時を表すことばの位置、副詞“都”“也”、疑問詞疑問文
第4課	助動詞“想”、動詞“喜欢”、動詞の重ね型、選択疑問文
第5課	数詞、量詞の使い方、“是”の省略、人民元の数え方
第6課	動詞“有”（所有）、反復疑問文、動詞“在”、方位詞
第7課	完了の“了”、連動文、前置詞“离”、時を表すことば
第8課	変化を表す“了”、動詞“有”（存在）、前置詞“在”
第9課	助動詞“可以”“会”“能”、直接話法と間接話法、前置詞“给”
第10課	時刻の言い方、経験を表す“过”、動作の回数を表す言い方、方向補語
第11課	“有点儿”、“是～的”、比較の表現
第12課	“把”構文、結果補語、“从～到…”、2つの目的語をもつ動詞、時間の長さの言い方
第13課	疑問詞“怎么”、使役動詞“让”“叫”、番号の言い方、年・月・日の言い方
第14課	様態補語、動作の進行を表す言い方、曜日の言い方
第15課	“就要～了”、名詞を修飾する語、主述構造の目的語、前置詞“为”

週1の授業を想定した教材なので、用意されている練習問題の量なども少ない。各文法事項に少なくとも2,3問の練習問題は用意したいところではあるが、そこまで詰め込むと週1コマ実施の授業向け教材としては過剰な分量になってしまうためか、1つの文法事項に対して、練習問題が用意されていないものも多くある。

b. 独自教科書の構成

そこで筆者が作成した、専用の教科書は、以下のような内容で構成した（表2-1・2-2）。1学期目・2学期目それぞれ15課分の内容があり、必ず毎週1課をこなすことを前提とした進行設定である。中国語検定とのタイミングのかみ合わせとしては、『中国語講読Iテキスト』の第10課が終了した時点で、1年生は6月末の中国語検定準4級を受験することになる。また、第2学期は第8課を終了するか、第9課の予習に取りかかった時点で4級を受験することになる。4級受験までに兼語文をおさえることが出来ないのが残念な部分ではあるが、4級の合格を達成するには最低限の項目をおさえることは出来ていると考えられる。中国語講読IIの冒頭3週間をかけて、方向補語について学習するなど、補語の学習に比較的贅沢なページ・時間配分を行っている。3週もかけると間延びするのではと思われるが、各課とも練習問題を10個程度と長文読解も用意してあるので、かなり内容としては濃密である。方向補語は、1文字の方向補語と複合方向補語の関係の整理が難しく、混乱をきたす学生が多いので、敢えて3回に分けた構成にしている。一方、中国語講読Iの第11課のように、通常は一度に教えない介詞の「在」「离」「从」「到」「对」「跟 和 与」「给」「往 向 朝」「替 为」を、一度まとめて教えてしまうなど、かなり詰め込んでいる部分もある（もちろん一度にこなせない学生がほとんどなので、折にふれて再度学習しなおす内容を、以後の内容に散りばめる工夫はしてある）。

このように、11月末までに中国語4級を十分狙えるような構成にするために、中国語講読の第9課までは、かなりの学習内容が凝縮した構成になっている。第2学期目の第10課以降は、いくつか新しい文法事項が登場するものの、とりあえず1年間での到達目標が4級である学生が息をつけるように、復習を中心とした内容構成になっており、3級を目指す学生は、希望すれば3級取得を視野に入れた、新しい構文の集中的な習得も出来る構成となっている。

表 2-1 : 中国語講読Ⅰテキスト (1 学期目)

第1課	ピンインと声調
第2課	ピンインをマスターしよう
第3課	SVO文「有」、「A是B」文、所有の「的」、「A不是B」、人称代名詞、指示代名詞、「吗」を用いる疑問文
第4課	疑問詞(名詞)を使った疑問文、「是」を使った反復疑問文、「的」の省略ルール、
第5課	形容詞述語文、主述述語文、
第6課	一般的なSVO文、完了の「了」、連動文、時点をあらわす時間詞、「不」と「没」、「也」と「都」
第7課	数字と時間詞、序数と量数、量詞、時点をあらわす時間詞のバリエーション、変化をあらわす「了」
第8課	指示代名詞(場所)、指示代名詞と量詞、お金の数え方、大きな数字の数え方、名詞の前の修飾語
第9課	量詞の復習・応用、助動詞「喜欢」「想」「要」、「一边~一边~」、動詞の重ね
第10課	方位詞(道案内表現の練習)、助動詞「要」(義務的表現)、助動詞「会」「能」「可以」、仮定を表す「就」、疑問詞「怎么」
第11課	介詞「在」「离」「从」「到」「对」「跟 和 与」「给」「往 向 朝」「替 为」
第12課	時間詞(時量)、動作の回数「次」、「星期 礼拜 周」、「一点儿」
第13課	過去の経験を表す「过」、「是~的」構文、選択疑問文「还是」
第14課	授与動詞「给」「教」「送」、「有」と「在」の復習、名詞述語文、量詞「些」、「越来越」
第15課	「快 ~ 了」構文、「比如」

表 2-2 : 中国語講読Ⅱテキスト (2 学期目)

第1課	方向補語「来」「去」、概数、直接話法
第2課	方向補語「上」「下」「进」「出」「回」「过」「起」「开」、
第3課	複合方向補語、「把」構文、「没办法」+動詞、形容詞+「地」+動詞、
第4課	様態補語、動詞+「着」
第5課	結果補語、仮定の文章「如果~的话」
第6課	可能補語、「正在~呢」、過去の否定で「了」を使う場合の注意
第7課	受身構文、「被」を用いた修飾表現、「因为~所以~」
第8課	比較の表現(同格、比較、最上級の形容表現)
第9課	「把」構文の応用、助動詞「打算 计划」
第10課	兼語文(1) 使役 依頼、「对~来说」構文、「除了~以外」構文
第11課	兼語文(2)「有」の応用、「这儿 那儿」の応用
第12課	離合詞、「不得不」、推量の「可能」
第13課	各種構文と応用
第14課	各種構文と応用
第15課	「以」の応用、「于」の応用

それにしても、第2学期目の第9課までの内容を、何の工夫もなく学生に詰め込もうとすると、かなりの無理が生じる。もちろんこのような凝縮された学習内容は、会話の授業の際に応用しつつ定着する時間がとられることが前提であるし、同時に並行して実施されている文法の授業でもある程度重ねて説明がなされることが前提でなければ、かなり無理な詰め込みを学生に強いてしまうことになる。そのため、このテキストと、この授業内容を単体で走らせることは難しく、他校のカリキュラム(特に第二外国語教育の場合)でそのまま応用するわけにはいかないかもしれない。

(4) 家庭学習の有効利用の工夫

そこで、かなり濃密な学習内容をこなすために必要となってくるのが、家庭学習の有効利用である。家庭学習と、教室での学習内容を、上手く継ぎ目なく組み立てることによって、濃密な学習内容を、極力無理なく指導することが出来ないか。これが、独自の教科書を作成する際に、もっとも注力した点である。また、この教科書に他校のカリキュラムや独自教材で応用できる工夫があるとすれば、家庭学習を有効利用することを前提にした構成になっている点であろう。初等教育・中等教育を念頭においた家庭学習の取り組みについては、少なからぬ教育実践例の報告や考察はなされているが、大学

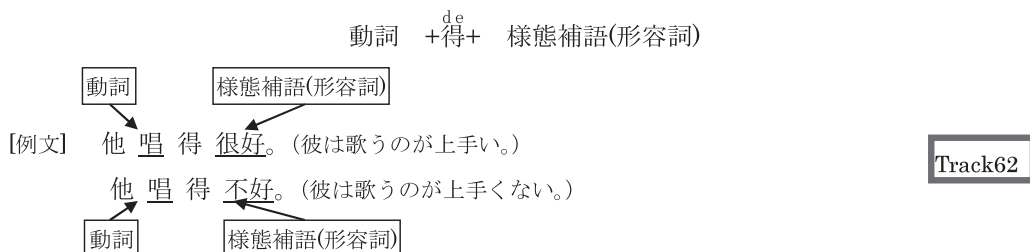
等の高等教育機関の教養教育を対象にした、家庭学習の有効利用については、頼るべき実践報告がほとんど見られず、更に中国語教育を対象にしたものとなると、闇夜に手探りで前に進むような状態であった。そこで今回の試みを、一事例として記録しておくことは、今後の中国語教育の発展にも、一定の貢献があるのではないかと思ひ至り、以下のような実践報告を記した次第である。

まず、週5コマで実施されている授業の1コマとはいえ、授業時間のみで表2-1・2-2のテキスト

図3-1：宿題用に配布のテキストの一例(中国語講読Ⅱテキスト第4課のための宿題部分から抜粋)

課題4 (様態補語)

今回は、補語の2番手、**様態補語(程度補語)**について勉強します。**様態補語**は、動詞の後ろに(場合によっては形容詞の後ろに)形容詞をつけて、その動詞の動作の様子が、どんな様子・状態で行われたかを補助的に説明するものです。作り方は、ここまで勉強した**方向補語**と似ていますが、**方向補語**と異なるのは、補語として用いられるのが「来」や「去」のような動詞ではなく**形容詞**である点、動詞と補語を合体させるときに、接着剤として「得^{de}」を使うという2点です(方向補語の時には、こんな接着剤は要らなかったですよ)。



この例文を見ても分かると思いますが、様態補語(形容詞)の部分は、形容詞述語文と同じルールが発動していることに注意して下さい。つまり、肯定の文章の場合、とくに「とても」という意味を出したくなくても、形容詞の前に「很」を付けて下さい。否定の文章を作りたいときは、この様態補語(形容詞)部分の前に、「不」を付けると否定の文章になります。

① 哥哥走得很快。

文全体を、適切な日本語に訳しなさい。[]

② 爷爷讲得不清楚。

文全体を、適切な日本語に訳しなさい。[]

③ 彼は食べるのが早い。

文全体を、適切な中国語に訳しなさい。[]

④ 彼女は話すのが流暢だ。(流暢：流利^{liú lì})

文全体を、適切な中国語に訳しなさい。[]

少し難しいですが、様態補語には、動詞フレーズや文章が用いられることもあります。

⑤ 他跑得直流汗。(直：ここでは「やたらに」とか「すっかり」といった副詞の意味で使っています。)

文全体を、適切な日本語に訳しなさい。[]

⑥ 哥哥说得大家都笑起来了。

文全体を、適切な日本語に訳しなさい。[]

図3-2：教室で使用する部分の一例（中国語講読Ⅱのテキスト第4課の冒頭部分から抜粋）

第4週

課題4 解答

- ① Gegezǒudehènkùài
哥哥走得很快。兄は歩くのが速い。Track65
- ② Yéyējiǎngdebùqīngchǔ
爷爷讲得不清楚。おじいさんは、話すのがはつきりしない。Track66
- ③ tāchīdéhènkùài
他吃得很 快。Track67
- ④ tāshuōdéhènlǐúlì
她说得很流利。Track68
- ⑤ Tāpǎodezhíliúhàn
他跑得直流汗。彼は走ってすっかり汗をかいた。(彼はやたらに汗を出して走る。Track69
- ⑥ Gēgēshuōdédàjiādōuxiàoliáile
哥哥说得大家都笑起来了。お兄さんが話すと、みな笑いだした。Track70

108

内容を解説することは、かなり難しい。そこで、翌週学習する予定の内容を宿題プリントにし、そこに解説予定の文言を、教師が授業中に喋る内容に近い形で掲載しておき、授業の際には、その課題の答え合わせと復習を行う様な構成にすることにした。一定フォーマットにはまった説明は、授業中に行う必要は無く、宿題の中にはめ込んでおけば効率が良くなる。一部抜粋であるが、第2学期目の第4課前に配布するプリントと、第4日冒頭で使用するプリントの内容の一例を紹介しておく（表3-1・3-2）。宿題プリントの方で、詳しく解説を行っていることが分かるだろうか。それに比べて、教室で行う第4課冒頭の解説部分は、あくまで宿題プリントの解説をベースにした、おさらい的な解答確認で済ませ、授業中、あまり解説に時間をとらずに済むように工夫しているわけである。文法に関する解説は、一定フォーマットにはまった内容は、学生に定着させるために教室内で教師が何度も喋って覚えるよりかは、なるべく今まで教室内で説明してきた流れに沿った説明文を宿題プリントで再現しておく。こうすれば、教師が何度も説明しなくても、学生は家庭で何度も読み返すことによって学習できるし、定着度合いも高くなると考えられる。また、教室での解答解説は簡単に済ませ、ここで学んだ内容を応用した長文読解に、早めに進ませ、そこで比較的十分な学習時間をとって応用力を高めることが狙いである。もちろん、実際の教室で使用する部分の記述が簡素であるのは、学生が宿題に取り組んだ結果発生する、予測しがたいエラーに柔軟に対応するためでもある。オートメーション的に処理できる部分（宿題）と、労働集約的に処理しなければならない部分を分けるための工夫でもある。また場合によっては、こういった宿題を重視した教材作成は、反転授業の実施などにも応用できるかもしれない。

もちろん、宿題の解答解説部分を更に充実させ、プラスアルファの説明を加える場面もある。例えば図4のように、教室での解答解説部分に、さらなる敬称表現について整理する表を加え、重ねて整理すると同時に、後の復習の際に役立てやすいような表を設置しておくなどの記述を多くした課もある。

一番の問題は、学生がこの家庭学習に、欠かすことなく取り組むかどうかである。学生が、宿題をやっ

図4：教室で使用する部分の一例（中国語講読Iテキスト第4課の冒頭部分から抜粋）

第4週

課題2 解答

① 同級生（名前の後ろに付けて「～さん」という意味で使うこともある。）
 [tóng xué]

(1) 張さんは私の同級生です。] 小 张 是我的 同学。 [Track44]
Xiǎo Zhāng shì wǒ de tóng xué

(2) 張さん、こんにちは。] 张 同学，你好！ [Track45]
Zhāng tóng xué, nǐ hǎo

② お嬢さん（名前の後ろに付けて「～さん」という意味で使うこともある。）
 [xiǎo jie] 她是马小姐吗？ [Track46]
Tā shì mǎ xiǎo jiě ma
 [彼女] 彼女は馬さんですか。彼女は馬お嬢さんですか。]
 ○人名(姓)の後に付ける敬称

③ 桃] [táo zi] [Track47]
Nǐ gè shì wǒ de táo zi ?
 [どれが私の桃ですか。] 哪个是我的桃子？

④ 蜜柑（みかん）] [jú zi] [Track48]
Wǒ de mì gān shì nǎ ge ?
 [私の蜜柑はどれですか。] 我的橘子是哪个。

⑤ 先生] [lǎo shī]
 [彼女は中国語の先生ですか。]
Shéi shì zhōng wén lǎo shī ? [Track49]
 谁是中文老师？

⑥ 路線バス] [gōng jiāo chē]
 [「公交车」は何ですか？]
Gōng jiāo chē shì shén me ? [Track50]
 “公交车”是什么？

⑦ 代表] [dài biǎo]
 [彼は私たちの代表ですか。]
Tā shì bù shì wǒ men de dài biǎo ? [Track51]
 他是不是我们的代表？

⑧ 学校] [xué xiào]
 会社] [gōng sī]
 [これは私の学校です。] 这是我学校。 [Track52]
Zhè shì wǒ xué xiào
 [あれは彼の会社です。] 那是他公司。 [Track53]
Nà shì tā gōng sī

⑨ お父さん] [bà ba]
 お姉さん] [jiě jie]
 [彼は私のお父さんです。] 他是我爸爸。 [Track54]
Tā shì wǒ bà ba
 [彼女はあなたのお姉さんですか。] 她是你姐姐吗？ [Track55]
Tā shì nǐ jiě jie ma

先生 xiān sheng 趙先生: 趙さん(男性に対して) zhào
 小姐 xiǎo jie 马小姐: 馬さん/馬お嬢さん mǎ
 女士 nǚ shì 魏女士: 魏さん(女性に対して) wèi

職名など
 老師 lǎo shī 楊老师: 楊先生(教師に対して) yáng
 同学 tóng xué 朱同学: 朱さん(同級生に対して) zhū
 师傅 shī fu 康师傅: 康師匠 kāng
 古い表現で、武術の先生などに対して使う。「师傅！」と単独でタクシー運転手や店主への呼びかけにも使う。

同志 tóng zhì 毛同志: 毛同志 máo
 古い表現で、共産党の黨員同士の呼びかけで使う。(革命映画などに出てくる。)

○人名(姓)の前に付ける敬称
 小 小李: 李さん(若い人・年下の相手に対して) xiǎo lǐ
 老 老王: 王さん(年配の人・年上の相手に対して) lǎo wáng

てこなければ、この学習方法は成立しない。この宿題は、授業の前日までに提出させ、授業当日に採点して返却し、その後授業を開始するという流れで行うが、定刻までに宿題を提出できるかどうかを成績評価の材料にし、ある程度の強制力を持たせた。このため現在は、成績評価の20%を、宿題の提出が滞りなく行われるかで判定している。授業が滞り行われるか。安定した家庭学習を行っているか

を評価する部分としては、妥当な配分であると考えられる。第2学期目の授業では、15回の宿題の提出を求めたが、10回、全く問題なく宿題を提出すれば20点と評価する。1度や2度、提出し忘れるという学生がいても、10回提出すれば満額評価というわけで、少し甘い気もするが、これではほど不登校などの問題を抱えた学生でなければ、大半の学生が問題なく宿題を提出しており、幸いにも今年度まで授業は滞りなく成立している。

もうひとつ考えておかなければいけないのが、家庭学習・宿題の量である。ここまで扱ってきた取り組みは、いってみれば、学習量を詰め込むための手法であるわけだが、無制限に家庭学習内に、教師が詰めたいだけの内容を詰めてしまえば、学生の通常生活が崩壊してしまう。そのため、この教科書のプロトタイプを使用し始めた2015年から、何人かサンプルの学生を選び、大学の研究室において実際に課題を行ってもらい、どの程度の時間がかかるかを定期的に測定している。要領の良い学生で20分程度、標準的な学生であれば30分程度で完了できる分量ということで、毎回10-12問程度の練習問題を軸にした課題にとどめるように調整するため、試行錯誤を繰り返した。この課題完了の時間が、40分を超えると、どうしても学生の集中力がもたないし、課題の提出率も落ちるため、この辺の調整は実は最も重要な部分であるといえる。

(5) 成果

今回紹介した教科書と学習方法の導入により、2016年以降、毎年、1年生向けの中国語履修者の1年間での中国語検定4級取得率は58-83%（中国語専攻のみの数字）にまで上昇した。かつては1年間での4級取得者がゼロであった年度もあったことを考えると、無視できない成果といえるのではないかと。また、1年間で3級取得を目指す学生は、毎年ほぼ4名以上の合格が日常的なこととなっている（これは中国語専攻・非専攻合わせた数字）。もっとも、これらの成果は、今回紹介した教科書とそれに関連した取り組みのみによるものではない、学科全体のその他の試みも含めた複合的な努力の賜物ではあると思うが。

今後の課題として考えているのは、教室での解説内容を、さらに動画にして復習教材として常時提供する手法である。不幸にも2020年はコロナ禍によって、オンラインでの授業対応を強いられる場面が多かったが、オンライン授業用に作成したオンデマンドの授業動画が、意外にも学生から復習教材として役に立つとの意見が寄せられている。実際に、オンデマンドの授業動画を提供した2020年度は、それ以前の年度よりも、更に高い成果をあげているという感触がある。そこで、教室での授業内容ですら家庭で反復して利用できる取り組みを目指してみることに、一定の価値はあるのではないかと考えられる。もし全回の授業動画を作成して提供すれば、どの程度の成果を挙げることが出来るか、試してみる価値はあるだろう。

実際に、東京外国語大学などでは、既にオンライン上の語学学習モジュールをメインにした教育を本格的に導入しており、語学教育の全面オンライン化・オンデマンド化は、想像しがたい遠い未来の話ではない³。ただ、東京外国語大学などのとりくみを、長崎外国語大学でそのまま出来るかといえば、それはそのまま応用というわけにはいかないだろう。ただ、多様な学生を想定して、今後更に進むであろう語学授業のオンライン・オンデマンド動画の利用率の上昇に、どう対応するのかは、今後研究のスピードを加速しておく必要があると思われる。

注

- 1 土居智典「初年次中国語教育における直接教授法的な手法による会話教育 —長崎外国語大学 2018・2019年度の実践事例報告—」(新長崎学研究センター『外国語教授法:蘭学・英学・独逸語・中国語・韓国語』、2021年)。
- 2 関西大学中国語教材研究会編『キクタン 入門編 中検準4級レベル』アルク、2008年・同前『キクタン 初級編 中検4級レベル』アルク、2008年・同前『キクタン 初中級編 中検3級レベル』アルク、2009年。
- 3 東京外国語大学言語モジュール 中国語 <http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/zh/>

